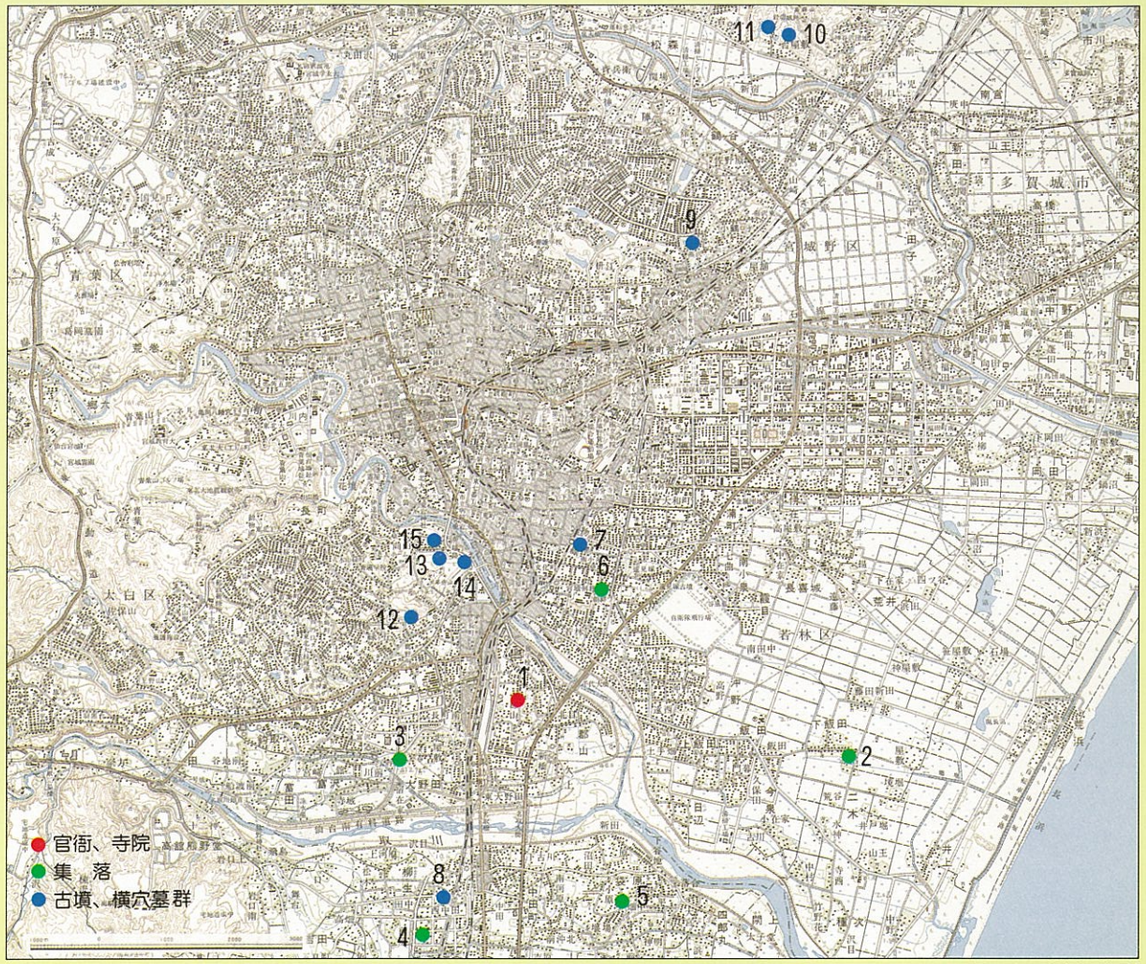
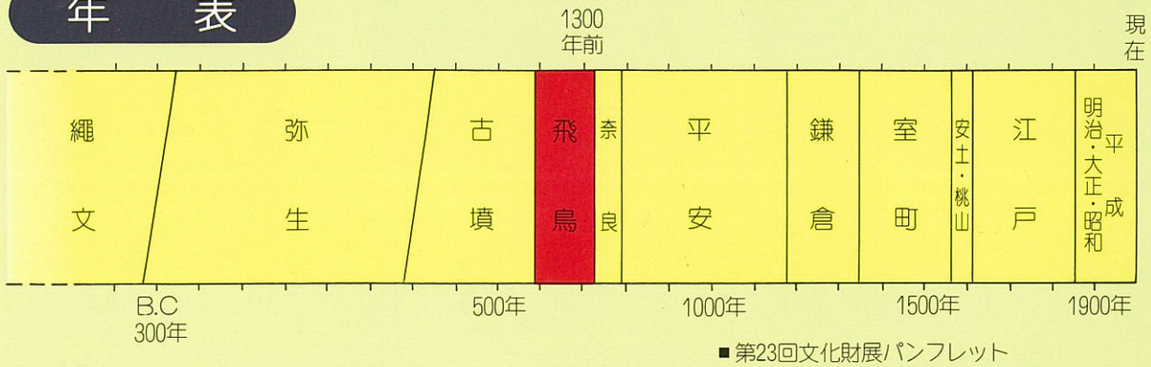
飛鳥時代の遺跡マップ



1、郡山遺跡
2、下飯田遺跡
3、六反田遺跡
4、栗遺跡
5、中田畑中遺跡
6、南小泉遺跡
7、法領塚古墳
8、安久東古墳群
9、善応寺横穴墓群
10、台屋敷横穴墓群
11、入生沢横穴墓群
12、茂ケ崎横穴墓群
13、大年寺山横穴墓群
14、宗禅寺横穴墓群
15、愛宕山横穴墓群

年　表



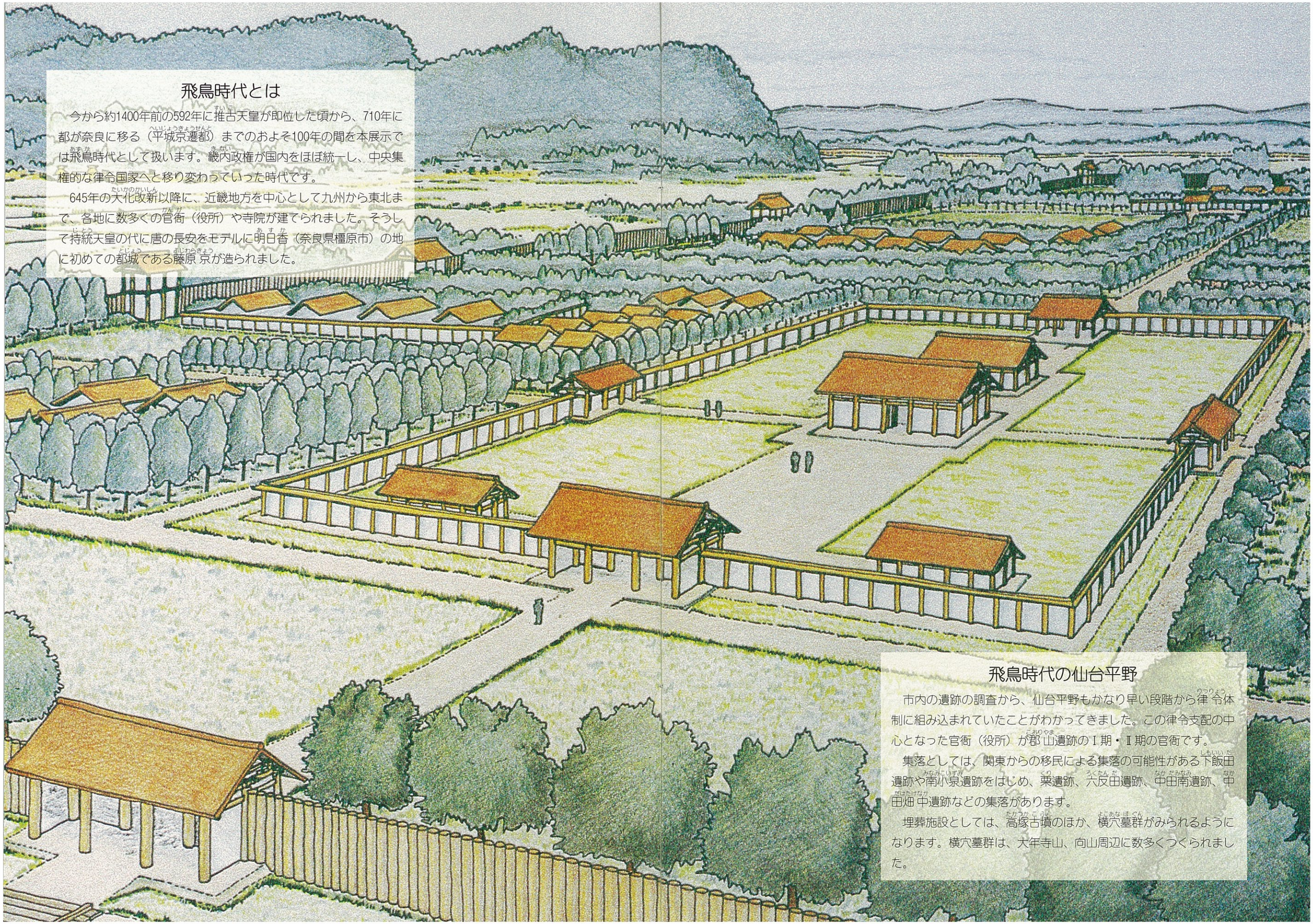
表紙　太白区郡山遺跡出土瓦
（単弁蓮華文軒丸瓦）

■第23回文化財展パンフレット
■発　行　仙台市教育委員会　文化財課
仙台市青葉区国分町三丁目７－１
（TEL 022-261-1111）
■発行日　平成７年10月26日
■印　刷　㈱共新精版印刷

仙台市文化財パンフレット第37集

飛鳥時代の仙台平野

仙　台　市　教　育　委　員　会



飛鳥時代とは

今から約1400年前の592年に推古天皇が即位した頃から、710年に都が奈良に移る（平城京遷都）までのおよそ100年の間を本展示では飛鳥時代として扱います。畿内政権が国内をほぼ統一し、中央集権的な律令国家へと移り変わっていった時代です。

645年の大化改新以降に、近畿地方を中心として九州から東北まで、各地に数多くの官衙（役所）や寺院が建てられました。そうして持統天皇の代に唐の長安をモデルに明日香（奈良県橿原市）の地に初めての都城である藤原京が造られました。

飛鳥時代の仙台平野

市内の遺跡の調査から、仙台平野もかなり早い段階から律令体制に組み込まれていたことがわかってきました。この律令支配の中心となった官衙（役所）が郡山遺跡のⅠ期・Ⅱ期の官衙です。

集落としては、関東からの移民による集落の可能性がある下飯田遺跡や南小泉遺跡をはじめ、栗遺跡、六反田遺跡、中田南遺跡、中田畑中遺跡などの集落があります。

埋葬施設としては、高塚古墳のほか、横穴墓群がみられるようになります。横穴墓群は、大年寺山、向山周辺に数多くつくられました。

律令政治の進展

645年の大化改新をきっかけとして、中央政府は、全国の土地や人々を直接支配しようとしました。この直後、陸奥国が置かれ中央の勢力が仙台にも直接及んできました。政府は陸奥国より北の勢力の及ばない地域や人々を律令体制に組み込もうとしていました。

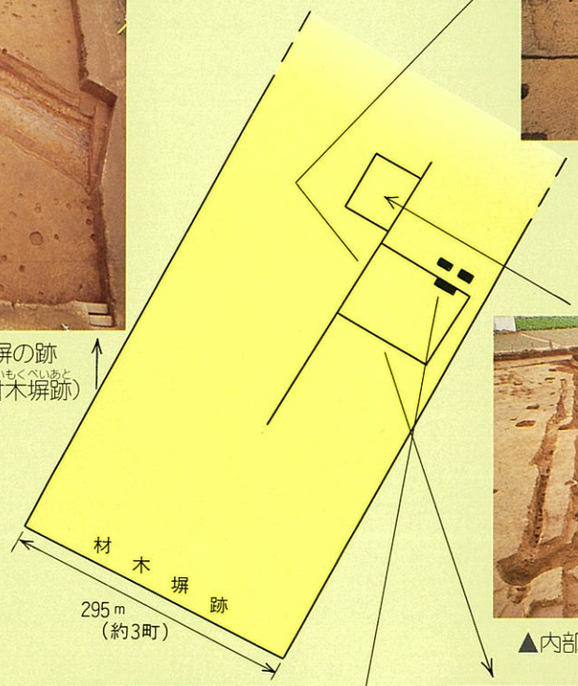
太白区郡山にある郡山遺跡は、７世紀中頃から８世紀初め（いまから約1300年前）の役所の跡で、陸奥国支配の行政拠点となっていた重要な遺跡であることがわかっています。

Ⅰ期官衙（最初につくられた役所）

郡山遺跡は、大きくわけて２時期の役所（官衙）が置かれました。古い時期の役所は、Ⅰ期官衙と呼んでいます。Ⅰ期官衙は、地方官衙（役所）のなかでは、全国的にみても最古級の役所で、７世紀中頃～７世紀末にかけてのものです。役所は真北から30°振れた方向を基準に建てられ、広さは東西約300m、南北600m以上あります。

▲役所を区画した塀の跡（材木塀跡）

▲鎧の一部や鉄の矢じりがみつかった鍛冶工房跡



▲内部を区画する塀に囲まれた建物跡

▲Ⅰ期官衙（役所）の中心地区

▲倉庫として使われた建物跡

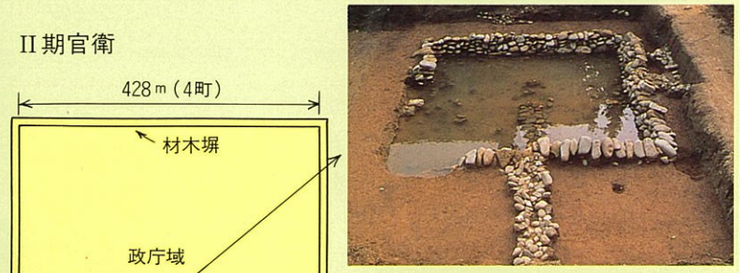
Ⅱ期官衙（新しくつくりかえられた役所）

７世紀末頃に、Ⅰ期官衙を取り壊し、役所を新しくつくりかえました。これがⅡ期官衙です。Ⅱ期官衙は、一辺428m（４町）の正方形の範囲を大溝と材木塀で囲んでいます。その囲みのなかには、重要な儀式や政務を行う政庁と呼ばれる区域や、大規模な建物跡、全国的にも貴重な石組池などが見つかっています。これらの建物は真北を基準として建てられています。

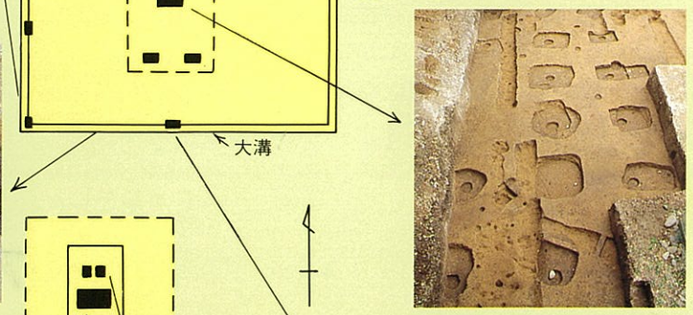
▲櫓状建物跡

▲役所を区画した材木塀跡（クリの丸太をすき間なく並べています。）

▲役人の居宅と考えられる建物跡（廃寺の東方に建物群があります。）

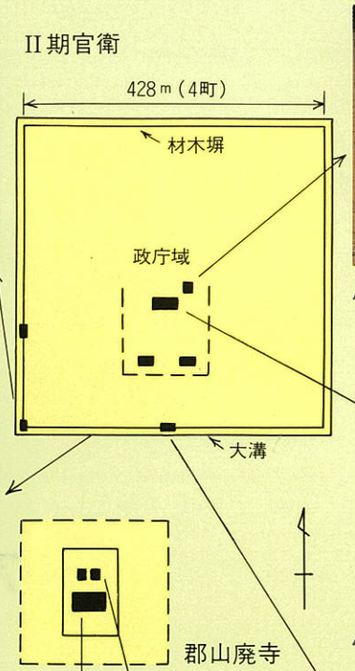


▲石　組　池



▲役所の中心地区（政庁正殿の東半部）

▶南門跡（南門の柱は直径50cmもあります。）



律令国家と仏教

律令政府は、早くから仏教の力によって国を治めようとしていました。郡山遺跡では、Ⅱ期官衙に付属寺院が造られました（郡山廃寺）。郡山廃寺はおよそ２町四方と推定されており、材木塀で囲まれた寺院の中心部には講堂の土台や僧坊跡がみつかっています。建物は瓦葺きであったと考えられています。

▲講堂の版築基壇（建物の土台）

▲僧　房　跡

郡山遺跡から出土した遺物

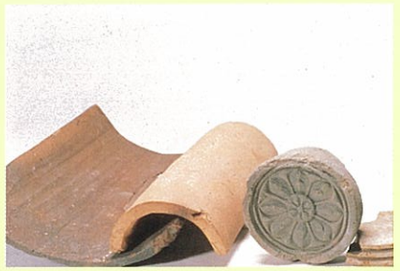
郡山遺跡では、関東や畿内との交流を示す土器が数多く出土しています。

▲在地産の土師器

▲関東系の土師器

▲畿内産の土師器

郡山遺跡では、役所や寺院に関係の深い遺物も多く出土しています。



▲寺院の建物に使われた瓦

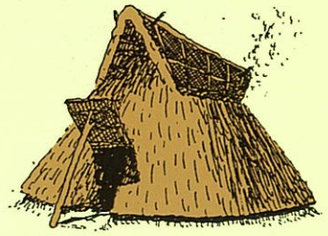
▲役人が使用した硯とナイフ

▶木簡（寺院の井戸から発見されました。）

村のくらし

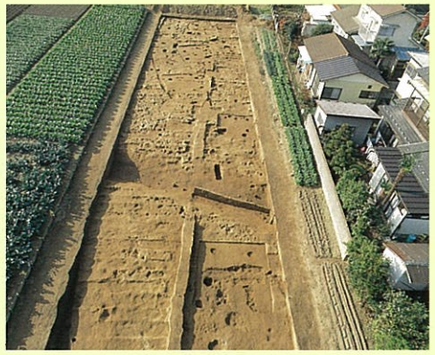
飛鳥時代になると、畿内では庶民の住居も地面を掘りくぼめた竪穴住居から平地に柱を立てた掘立柱建物に移っていきます。これに対して、仙台平野の住居は依然として竪穴住居が主体を占めますが、六反田遺跡などでは掘立柱建物跡も発見されています。集落の周辺では畑や水田の跡も発見されています。

▲竪穴住居跡（六反田遺跡）



▲竪穴住居の復元図

▲関東地方の住居と類似した住居跡
（下飯田遺跡）



▲大溝で区画された集落跡
（関東からの移民による村と考えられています。南小泉遺跡）

集落においても人や物の交流を示すものが発見されています。関東系土師器は、下飯田遺跡や南小泉遺跡などで発見されており、関東地方からの移民と関係があると考えられています。

下飯田遺跡では、郡山遺跡で出土したものと同じ様式の関東系土師器のほか、郡山廃寺で使われたものと同じような瓦などが発見されています。また、官衙でみられるような太い柱を利用した住居もみつかっています。

▲直径約30㎝のクリ材の柱が腐らずに残っていた住居跡（下飯田遺跡）

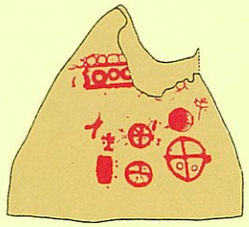
▲下飯田遺跡出土の瓦
（郡山廃寺出土の瓦と同じ様式の瓦）

墓の移りかわり

仙台平野も飛鳥時代になると、高塚古墳に横穴式石室がみられるようになり、小規模な円墳が数多く密集する群集墳をなすようになります。また、墳丘を持たない横穴墓が出現するようになります。太白区向山地区には、200基以上と考えられている横穴墓群があり、郡山遺跡と関連をもった人々が葬られた可能性が考えられています。

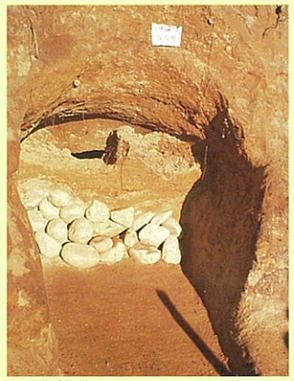
▲安久東古墳群
（７世紀を中心とする群集墳。写真はその１つである安久諏訪古墳）

▲愛宕山横穴墓群
（装飾横穴墓。７世紀末～８世紀前半）

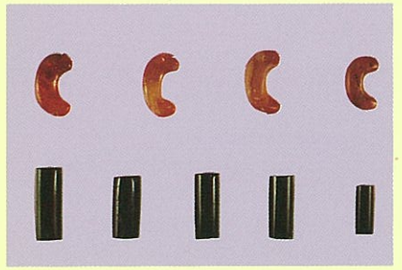


▲茂ケ崎横穴墓群（７世紀中～後半）

▲大年寺山横穴墓群（６世紀末～７世紀）



▲宗禅寺横穴墓群
（７世紀後半）



▲茂ケ崎横穴墓群出土の玉類

▲茂ケ崎横穴墓群出土の須恵器